

指導資料



鹿児島県総合教育センター

特別支援教育 第151号

- 幼, 小, 中, 高, 特別支援学校対象 -

平成20年10月発行

支援のアイデアが集まる事例研究会の進め方

学校・園全体で、特別な教育的支援を必要とする幼児児童生徒への支援を組織的に進めていく上で、幼児児童生徒に関する情報を教職員間で共有し、支援の在り方を検討する場として、事例研究会は重要な役割を担っている。しかし、学校等で行われている事例研究会の多くは、学級担任等が幼児児童生徒の問題となる行動や学習面の困難さなどの状況を報告し、その後、参加者が意見交換を行うといった形式で行われ、資料準備等にかかる学級担任等の負担も大きい。また、事例の報告に時間がかかり、具体的な支援の手だてについて十分な深まりが得られないまま協議が終わってしまい、組織的な支援の展開につながらないこともある。

そこで本稿では、特別な教育的支援を必要とする幼児児童生徒の支援の方向性を探り、組織的な支援につなげるために効果的な事例研究会の進め方について述べる。

1 事例研究会のねらい

特別な教育的支援を必要とする幼児児童生徒に係る事例研究会では、特に次のようなことをねらいとして取り組むことが大切である。

幼児児童生徒の学習面の困難さや問題となる行動の要因や背景を明らかにし、幼児児童生徒の理解を深める。

幼児児童生徒に対する効果的な指導法や支援の在り方を探り、教職員の指導力の向上を図る。

幼児児童生徒に関係する教職員間の連携を強め、チームで支援する体制づくりに資する。

2 事例研究会の進め方

事例研究会のねらいを達成するためには、参加者全員が支援策等の検討に関与していくことが大切である。インシデント・プロセス法やKJ法は、事例提供者にとって負担感が少なく、更に全員参加型で比較的容易に取り組みやすいことから、様々な事例研究会で活用されている。

インシデント・プロセス法とは、発表された簡単な状況を示す出来事(インシデント)を基にして、参加者が次々に質問することにより事例の概要を明らかにしながら、事例の原因と対策を考えていく事例研究法である。

KJ法とは、集団による問題解決法の一つであり、文化人類学者の川喜田二郎が野外調査の資料整理のために考案した手法である。次のような手順で行う。

様々なアイデアを付せん紙などに一枚ずつ書き出し、用紙に貼っていく。

集まったアイデアを類似の内容ごとに分類していく。

それぞれの相関関係を分析し、グループの意見を集約する。

(1) 事例研究会を計画する段階

事例研究会の充実を図るためには、事例研究会を企画する担当者が、事例提供者と事前に十分打合せを重ね、事例提供者が抱えている課題をより具体化することが必要である。課題が具体的であればあるほど、協議も焦点化される。

また、事例研究会の目的、スケジュールを明確にし、この時間でどこまで話し合うのか具体的に整理し、参加者に伝えられるよう準備することも大切である。

(2) 事例研究会の流れ

事例研究会の基本的な進め方は、全体での活動とグループでの活動を組み合わせて、図1のような流れで行う。

(3) 実施上の留意点

事例研究会を実施するに当たっては、次のような点に留意したい。

ア 進行役は、観点を示すなどして参加者の積極的な質問を促し、事例に関する問題の焦点化を図る。また、協議の過程等が参加者が具体的に把握しやすいように、質疑の内容をホワイトボード等へ書き、協議事項などが視覚的に確認できるような工夫をする。

イ 参加者は、事例提供者の支援の在り方を責めるような質問はしないようにする。

ウ グループでの支援策を検討する場面では「自分が担任ならどうするか」、「今、すぐ実践できることは何か」といった視点で、具体的、現実的な支援策を基本に、参加者一人一人の自由な

発想を大切にする。

エ 事例提供者は、グループから出てきた意見を、自分の方針と比較しながら実現可能な支援策を検討する。

オ 事例研究会の中で知り得た幼児児童生徒の個人情報については、その保護に十分配慮する。

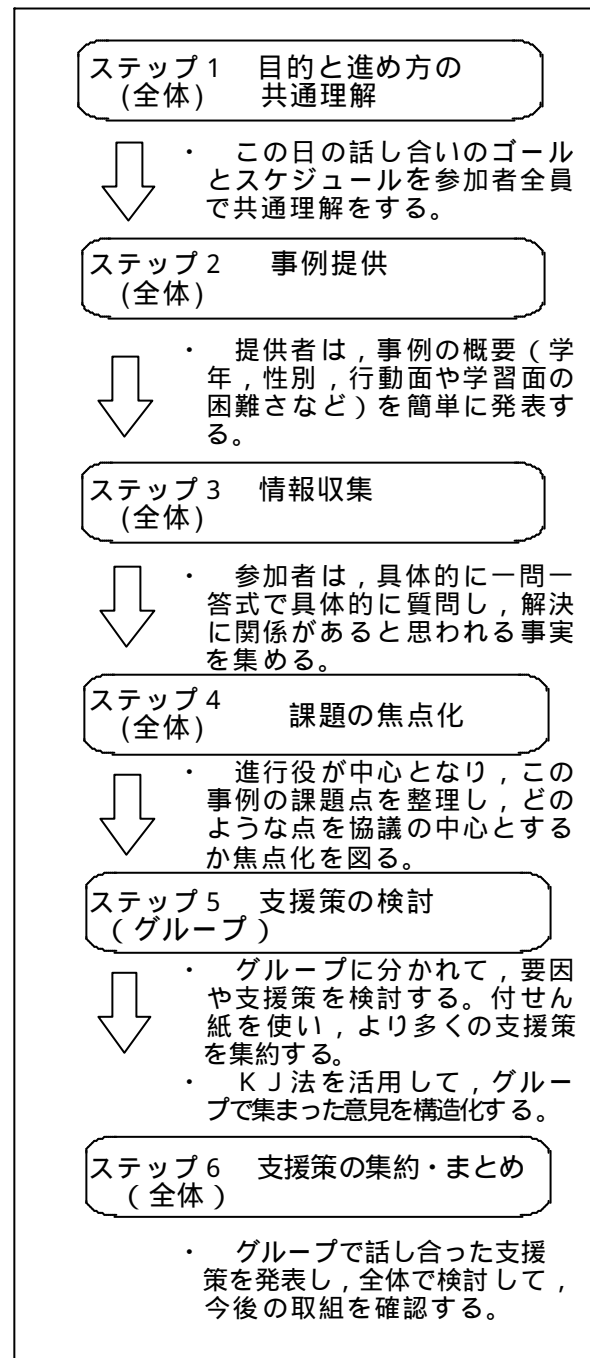


図1 事例研究会の流れ

3 事例研究会の実践例

通常の学級に在籍している学習面に困難さのある児童の指導、支援に関する事例研究会の実践例を示す。本事例研究会は、特別支援教育委員会の活動の一環として、企画、進行を特別支援教育コーディネーターが担当し、全職員(28人)が参加して行われた。

(1) 事例の概要

ア 対象 小学校2年生男児(通常の学級に在籍)

イ 対象児の実態

文章中の助詞や文末などを自分の思い込みで読んだり、読めない漢字をとばして読んだりして、文意を把握することができない。

授業場面で集中できず、手遊びをしていることが多い。

(2) 事例研究会の実際

段階	時間	担当	具体的な事例研究の内容等
目的と進め方の共通理解	↑ 3分	進行	<ul style="list-style-type: none"> 時間配分と事例研究会の進め方の説明 目的の説明 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 「学級全体で取り組めること」と「個別に取り組めること」をまとめ、今後の本児の支援にいかす。 </div>
事例の提供	X 5分	提供者	<ul style="list-style-type: none"> 事例対象児に関して、学習面の状況、担任の気付きなどを簡単に口頭で説明 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 国語の学習場面での本読みの苦手さ、文意を理解して答えることの困難さ。授業中の手遊びの多さ。など </div>
情報収集(質疑応答)	X 7分	参加者	<ul style="list-style-type: none"> 事例に関する質疑応答(例) <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;">文字の読み書きはどうか。</div> <div style="font-size: 2em;">⇒</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;">平仮名は読み書き可。漢字は細かい部分の間違いがある。</div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;">どんな読み方をするのか。</div> <div style="font-size: 2em;">⇒</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;">文字をとばしたり、文末を思い込みで読んだりする。</div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;">他の教科ではどうか。</div> <div style="font-size: 2em;">⇒</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;">算数は同様、図工は集中する。</div> </div> <p>質疑は、一問一答式で行い、一度出た情報については、繰り返し質問しないようにする。</p>
課題の焦点化	X 3分	進行	<ul style="list-style-type: none"> 事前の担任との打合せを踏まえ、具体的に検討する課題をまとめ参加者への提示 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 国語の時間、教科書の文章を正しく理解させるにはどうしたらいいか？ </div>
支援策の検討	X 17分	参加者	<ul style="list-style-type: none"> 事前に5～6人のグループを編成しておき、グループごとに支援策を検討 個人で検討(付せん紙に記入) 「学級全体で取り組めること」と「個別に取り組めること」を記入する付せん紙は、色分けして記入する。 「自分だったら、こうする」といった視点で具体的な支援につながるように記入する。 付せん紙をA3の紙にはりながら、実行可能な支援策をグループで検討し、記録用紙(図2)にまとめる。 支援策を取り組むに当たって優先順位を決める。

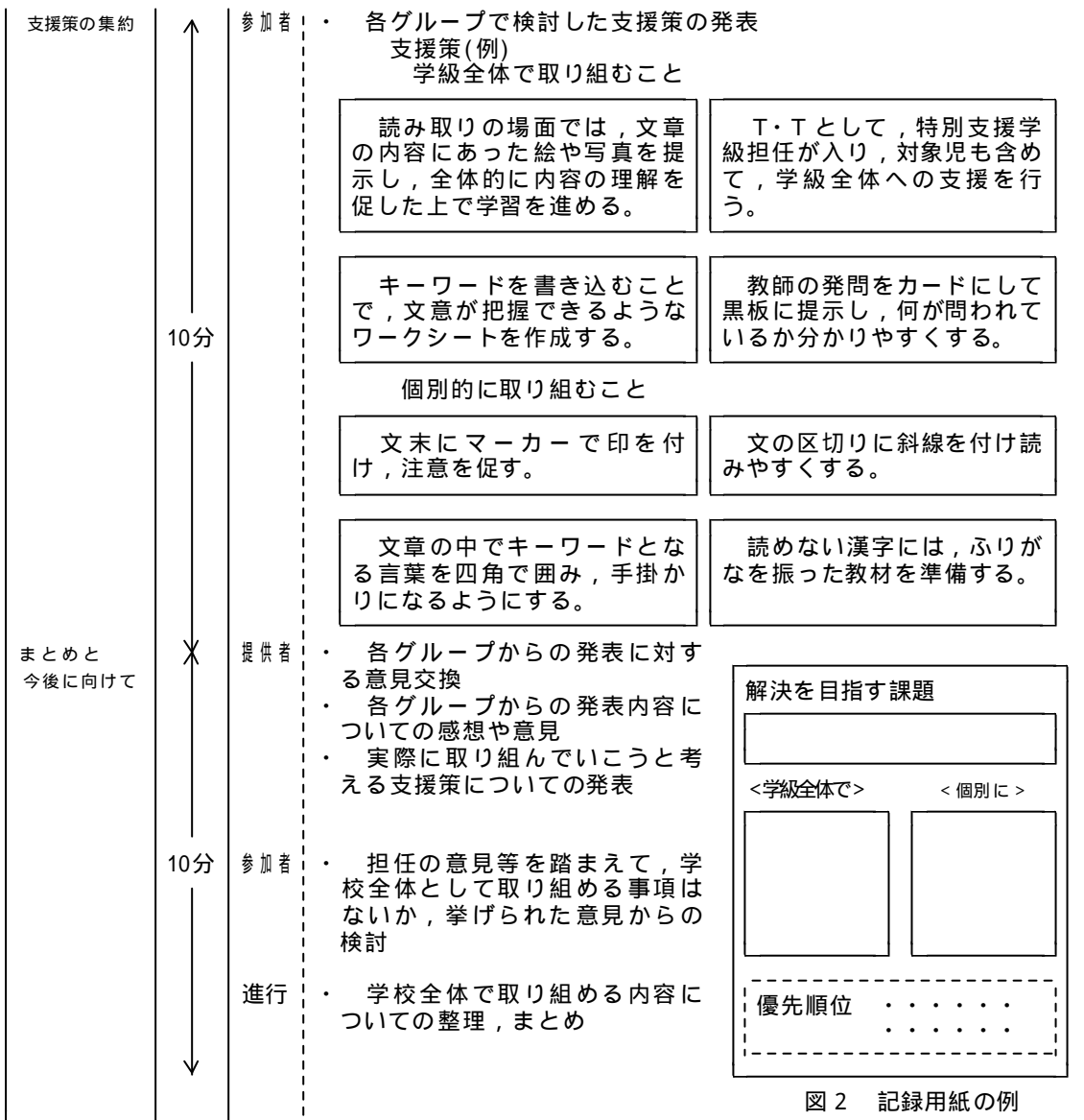


図2 記録用紙の例

事例研究会は、事例提供者にとって、今までの取組の問題点などを整理し直し、新たな支援策を検討する機会になるとともに、参加者にとっては、「自分だったらどうするか」を考えるよい機会となる。また、支援の必要な児童生徒の理解を深め、情報共有の場としても事例研究会は重要な役割をもつ。

さらに、学校全体として、参加者一人一人が主体的に参加し、幼児児童生徒の支援策を検討する事例研究会を実施することにより、

教職員一人一人の特別支援教育にかかわる意識が高まるとともに、お互いの意見を傾聴し、共に考えることの重要性が理解でき、お互いを支え合う協力的な人間関係の構築も可能になる。今後、支援につながる事例研究会が積極的に取り組まれることを期待する。

【引用・参考文献】

研究紀要 第110号「児童生徒一人一人を生かす教育相談活動の在り方に関する研究」

鹿児島県総合教育センター 平成18年3月

(特別支援教育研修課)